聖霊降臨後第９主日（特定１２）　　からし種とパン種の話　　２０２３．７．３０．

２週間前は、種まきのたとえ話、先週は、毒麦のたとえが福音書には選ばれていて、今日は３つ目の種の話になります。「からし種」と「パン種」のお話です。

今日の種の話は、この２週間の種の話のまとめのようなお話なんだ、ということ覚えてください。

２週前は、種を蒔く人が、道端や、石地、茨の中、また良い土地に種を蒔いたのですが、道端で鳥に食べられた種以外は、全部芽を出したのです。種というのは古い種でもそれ自身には成長するための力があることを教えていました。

それで言いたいのは、聖書のみ言葉には力がある、ということです。ギデオン協会の人々は、それを信じて、もしかしたらゴミ箱へ捨てられるかもしれない新約聖書を、無料で人々に配っているのです。
いつ、それによって人が救われるかわからないから、その努力をしようというわけです。

それで、２週間前に引用したのは、ヤコブの手紙でした。
ヤコブの手紙１章２１節
「だから、あらゆる汚れやあふれるほどの悪を素直に捨て去り、心に植え付けられた御言葉を受け入れなさい。この御言葉は、あなたがたの魂を救うことができます。」
これを以前の口語訳聖書で読むと
「だから、すべての汚れや、はなはだしい悪を捨て去って、心に植えつけられている御言を、すなおに受け入れなさい。御言には、あなたがたのたましいを救う力がある。」と訳されています。

今日の種の話は、一つはからし種の話でした。けし粒よりも小さなからし種が１年間で、２メートルも３メートルもの大きさに成長するので、その成長ぶりを取り上げて話せる、わかりやすいたとえなのでしょう。

今から３３年前、イスラエルに２か月居た時には、しばしばエルサレムの城壁の周りを歩いていましたが、夏にその辺りにはたくさんのからし種の木がありました。１年で枯れてしまうのですが、本当に大きく成長していますから、イスラエルの人々には身近な植物だと思われます。

この一連の種の話は、天の国、つまり神様の国である教会の成長を語っているのですから、どんな迫害の中でも、教会は成長するんだ、というメッセージがあるのです。

しかし、次に出てくる「パン種」の話が、もっと重要なんです。

「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

２週間前にも紹介しましたが、福音書のイエス様の言葉は、本当にイエス様が語られたことばかどうか、というファイブゴスペルズでは、からし種は上から２番目ですが、パン種は一番上なんです。

つまり、現代の新約聖書の学者さんたちの多くが、このパン種の話はイエス様ご自身が語られたお話だ、という風に信じている、大切な言葉です。

これは、ただ、膨れて、からし種のように大きくなる、というだけの問題ではありません。

「パン種」という言葉が、当時のユダヤ教ではいい意味で使われていない、ということを知っておく必要があります。

イエス様自身このマタイによる福音書１６章では、
「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種」という見出しの所で、

『6 イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」と言われた。』

とあります。パン種は、悪者の象徴なのです。

コリントの信徒への手紙一　５章　「不道徳な人々との交際」というところでは、

『6 あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。7 いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。8 だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。』とパウロは言うのです。

パン種、つまりイースト菌が入る、というのは、純粋な練り粉のなかに、毒麦のような悪い者が混じっていることを指すのにパウロも使っています。

ですから、天の国、神の国というのが、単純に大きくなってゆく、という風に考えたのでは、パン種の聖書的な意味を受け取っていないことになるのです。

それで、ひとつの解釈は、教会の中にも悪い人たちが居て、教会は大きくなっても、それと同時に腐敗が始まっている、という考え方があるのです。

キリスト教が迫害を受けている頃は純粋な信仰を保っていたが、公認されて、やがてローマ帝国の国教になってくると、大きな礼拝堂が建てられるのですが、強い権力を教会が握ってしまい、堕落した中世の教会になり、マルチン・ルターの宗教改革につながっていった、と説明する人々もいるのです。

しかし、私はそのような教会の腐敗ということをイエス様が予告されたということではなくて、このパン種のような教会の悪さではなく、逆に良さを説明しているのではないか、と思ったのです。

ある注解書には面白いことが書かれていました。

『注目すべきことに、ユダヤ教においてパン種は不浄のものとされていた。過越しの祭りにおいて神殿には種なしパンがささげられ、各家庭でもパン種をすっかり取り除いて家を清めた。そのようなパン種をイエスが神の国のたとえに用いるのは、彼がユダヤ教から見て、いかがわしいと思われる連中を仲間としていたことと関係があろう。そうした者との交わりが、全体の変革を可能とする。』（新共同訳新約聖書注解）

イエス様のはじめられた教会は、社会でのけ者になった、それこそ毒麦か、ものを腐敗させるイースト菌のような人たちで構成されている。しかし、家を建てる者の退けた石が、隅の親石になった（詩編１１８・２２）ように、ユダヤ教の異端として発生したイエス様の集団は、社会を変える教会に変化するんだ、という考えがその中にあったのだろうと推測するのです。

だから、今日のからし種の話とパン種の話は、単に成長するとか、膨れるとか、腐敗するとかという現象ではなく、今までの常識を覆すような、教会には強い力が秘められているのだ、ということを考えたいのです。

何年か前、夏休みで教会に子どもたちを集めて、「いのちをいただく」という、牛を殺してその肉を食べている絵本のビデオを見せたことがあります。このような牛を殺す仕事に携わっている人々は、世間では汚い仕事とか卑しい仕事の人たち、ということで偏見を持たれていましたが、それは間違った考えであることを教えるものでした。読み聞かせの絵本は、大変私たちに強いメッセージを与えるものでした。

これから、私たちは、ただ礼拝をするだけでなく、世間に目を向け、今多くの悩みや苦しみを持っている人が、教会へ来ることで、それらの束縛から解放されるような教会に成長することを目指すことが大切でしょう。からし種やパン種の話を通して、私たちが行なう伝道に新たな示唆が与えられている、と感じます。

パン種が膨れて行くような教会に成長したいと思います。

そんなことを考えながら、教会の伝道活動を考え、行って行きたいと思います。

（余分な話）
先日、集会室の流し台の穴から、もやしのような、しかしそれよりずっと細いものが何本も伸びていたので、何だろうと思ってよく見ました。すると、緑の葉っぱの先に白い種の殻のようなものがくっついていました。これは間引いた小さいメロンを漬物にする時、捨てたメロンの種だとわかりました。捨ててしまうような間引かれたメロンの種にも、力があることを知って、改めて、種まきの話。み言葉の種には力があることを知らされたのでした。